

# 近世の牧とウマの埋葬

萩原 恭一

## はじめに

令和2年4月から9月にかけて、筆者は流山市大畔おおぐろなかのわりに所在する大畔中ノ割遺跡の発掘調査に従事した。これは、新設する流山市立おおぐろの森中学校建設に伴う埋蔵文化財調査であり、流山市教育委員会が発掘調査主体となり、当財団はその一部についての支援事業を受託した。同遺跡の発掘調査報告書はまだ刊行されておらず、詳細についてはすべて報告書に譲るべきであり、現時点において筆者が記せることは非常に限られたものにしかならないが、そのような状況においても一点考察を加えておきたいのが、本論でタイトルとした「近世の牧とウマの埋葬」についてである。

筆者が担当した調査区だけでも、シシアナ(宍穴)と考えられる深い大型土坑4基から、合計6体(と考えられる)ウマの骨が検出された。これらの土坑の覆土は、ハードローム塊を多く含む目の粗い土で、明らかに人為的に埋め戻されていた。しかも写真2の個体は、いわゆるイヌがとる「伏せ」の姿勢のように後ろ脚を折りそそえた姿で坑底から全身骨が検出されていることから、これらのウマの骨は人間による埋葬行為の結果と判断された。なお、詳細は報告書に譲るが、隣接するおおぐろの森小学校予定地も含め、遺跡全体では18遺構から20体ほどのウマの骨が検出されている。これらのウマがこのように深い穴に埋められた経緯とは何なのかを探るのが本稿の目的である。

## 1 大畔中ノ割遺跡の位置と上野牧

大畔中ノ割遺跡は、江戸時代の幕府の直営牧である「小金牧こがねまき」のうちの「上野牧かみのまき」の牧の外側、西へ200mほど離れた場所に位置する遺跡である。牧の外側であるとする事の根拠は、第1図のとおり、東側200mほどの地点にかつて野馬土手が南北に走っていたことによる(千葉県教育委員会1997、2005)。筆者が調査したウマの骨の出土している4基の大型土坑からは共伴遺物が検出されていなかったため時期を特定することは難しいが、①江戸時代の牧に隣接していること、②何体かのウマは遺存状態が非常に良好な全身骨であっ

たこと、③埋葬個体数の総数が多いこと、の三点から、大きく捉えて牧が設置・運営されていた江戸時代から牧の運営の終了直後の明治初年までの間の時期に埋められた、牧に関わるウマのものであると考えるのが妥当であろうと考えられた。

なお本稿においては、考古資料の場合は「ウマ」、文献資料の場合は「馬」、「野馬」として使い分けて記述する。

## 2 結論

近世の小金牧、佐倉牧については、実に膨大な文書資料が残されている。大畔中ノ割遺跡で見つかったウマたちの真相に迫るには、考古学的な検証よりもこれら文書資料に当たることの方が有効であろうと考え、それらの翻刻資料が掲載されている県史やいくつもの市町村史を一通り当たってみた。その結果、最終的に『流山市史 近世資料編Ⅱ』192～193ページに掲載されている「溜井敷御野馬斃馬に付届 文政十年五月[岡田清家]」という史料に行き着いた。

以下、長い引用になるが、文書の途中に連らねられている当番の百姓等の名は略し、必要な部分のみを抜粋して転載する。

=====

乍恐以書付奉申上候

一 文化三寅年四月五日字小山溜井敷南方ニ御野馬斃馬御座候ニ付小谷伊三郎様鈴木伝七様江為御注進組頭長右衛門罷出候

(略)

一 文化九申年二月六日字小山溜井敷北方ニ御野馬病馬御座候ニ付為御注進小金御厩御役所江組頭忠七罷出候処御見分として小谷伊三郎様吉岡甚四郎様御出役有之候

(略)

同八日右御野馬斃馬ニ相成候ニ付鈴木伝七様江為御注進組頭長右衛門罷出申候処花之井半蔵様御立合ニ而御見分之上市野谷新木戸前犬落江可遺旨被仰聞候ニ付

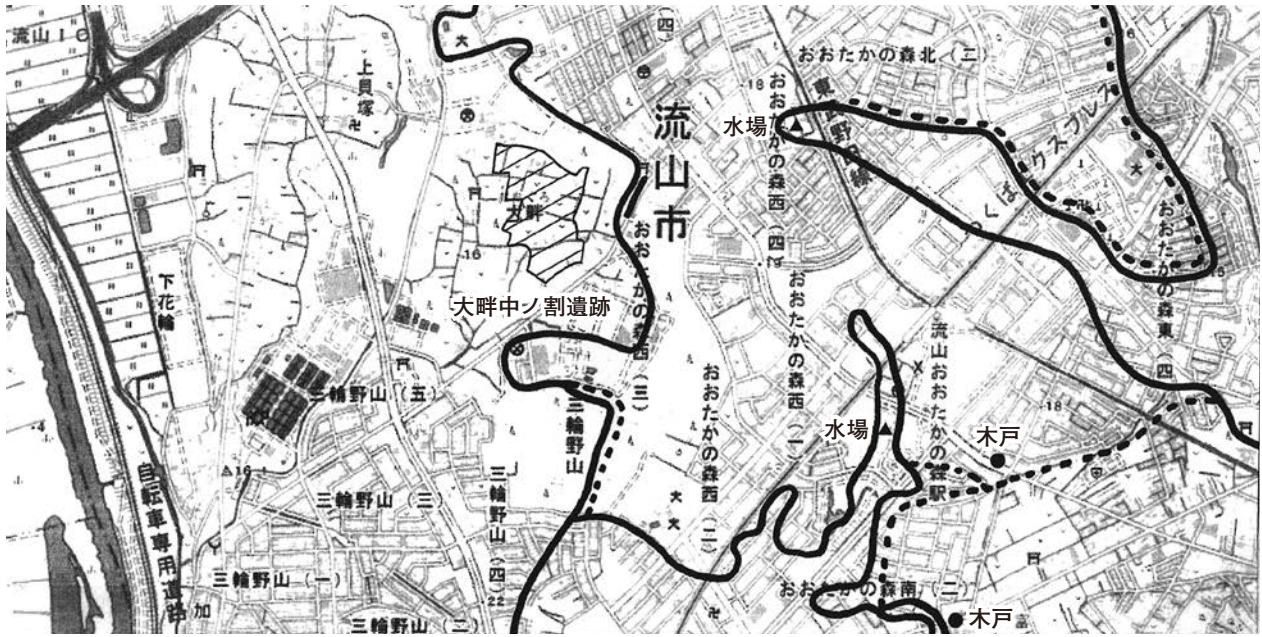
(略)



写真1 SK44(右端)～46(左端)の3基並ぶシシアナ(犬落とし)とウマの骨の出土状況

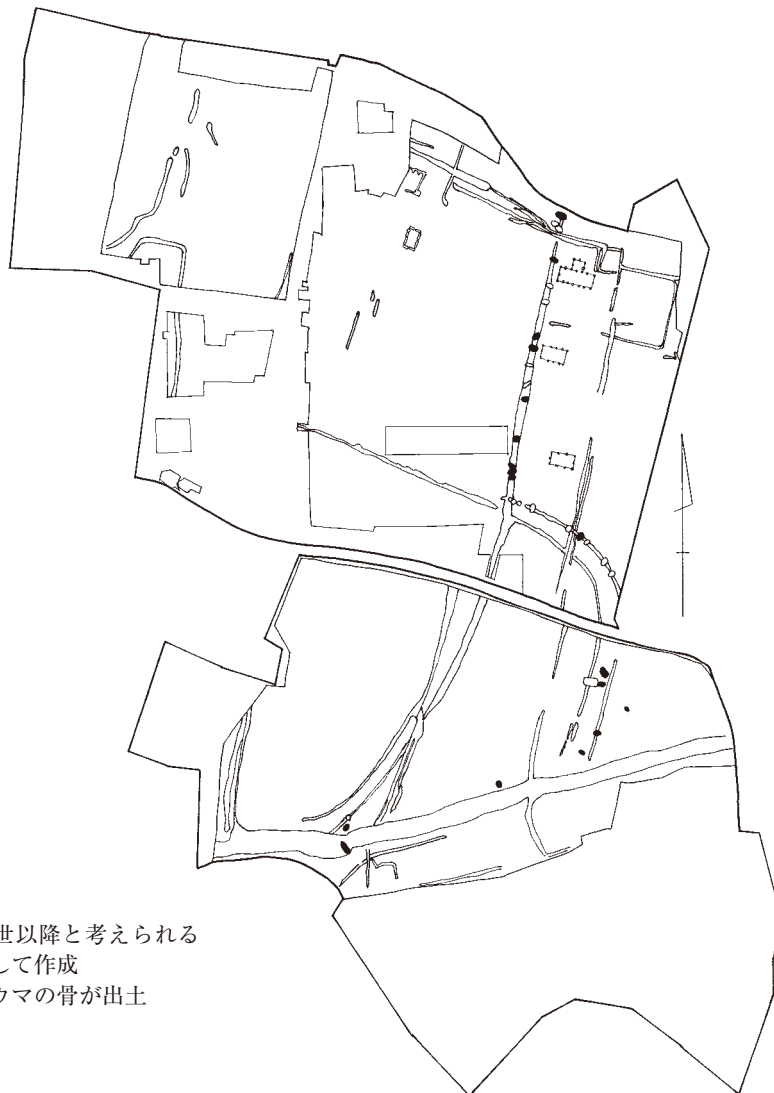


写真2 SK46の坑底に埋葬されていたウマの骨の検出状況



※千葉県教育委員会2005から編集作図

第1図 大畔中ノ割遺跡と野馬土手位置図(S : 1/40,000)



※全測図から、近世以降と考えられる遺構のみを抽出して作成  
 ※黒塗の遺構からウマの骨が出土

第2図 大畔中ノ割遺跡全測図(S : 1/2,000)

一 文政十亥年二月五日字小山溜井敷中堀ニ御野馬斃馬御座候ニ付為御注進組頭新兵衛罷出申候處為御見分鈴木伝七様吉野貞八様御出役之上野々下村木戸前東深井村木戸前松ヶ崎村木戸前犬落はなし場所江遣申候  
(略)

右溜井ニ御野馬病馬斃馬ニ付村役人物百姓罷出相勤申候義取調可差出旨被仰聞候ニ付右之通相違無御座候此外毎年御野馬捕前溜井渡越并土橋道共定式自普請仕来り御座候右之段御尋ニ付書付ヲ以奉申上候以上

文政十年亥五月	駒木新田
	名主 八郎兵衛
	組頭 新兵衛
	同 忠七

=====  
当該文書は、流山市内に所在した小山の溜井で野馬が病気になったり死んだりしたので、駒木新田の惣百姓が出動し監視や移送に勤めたかを調査して報告するように、と命じられたことへの駒木新田の名主等からの報告である。

重要なのはアンダーラインで示した部分の、斃馬を見分した後に木戸前の「犬落とし」に移送している点である。ここに「埋める」、「葬る」の記述は無いが、この文章の流れを見る限り、この後斃馬を犬落としの穴に埋めた、と考えるのは極めて自然である。そうでないと、何故わざわざ犬落としに移送したのかが解釈できない。以上の点から、犬落としの穴＝シシアナ(穴)に、牧の斃馬を埋める例が実際にあったことが確認できるのである。このことから見ても、大畔中ノ割遺跡の多くのウマの骨は、上野牧で亡くなったウマ＝斃馬を、シシアナ＝犬落としに埋葬したものである蓋然性が極めて高いと考えられる。

第1図は、『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』(千葉県教育委員会2005)に記されている野馬土手と大畔中ノ割遺跡の位置関係を示したものであるが、これとは別に青木更吉氏によれば(青木2001)大畔には木戸があったと記されている。大畔中ノ割遺跡は野馬土手から200mほど離れてはいるが、「木戸前の…犬落とし」という状況にかなり近いものと考えても良いのかも知れない。

### 3 近世の牧における野馬の埋葬の背景について

先に結論を示したため、以下の記述はすべて蛇足になってしまうが、この結論に至るまでに小金牧や佐倉牧関係の多くの史料を読み進め、近世の牧にはどれく

らいの数の馬が飼育されていたのか、毎年どれくらいの馬が死んでいたのか、毎年どれくらいの馬が捕らえられ江戸に送られたり払い下げられたりしていたのか、さらに犬打ちについても集計することができたので、以下にそれぞれを記して行きたい。

### 4 牧にはどれくらいの野馬がいて毎年どれくらい死んだのか

当時の牧での野馬の飼育は、水場の管理や降雪時の餌の補給等の世話以外はほぼ半野生状態での放牧であった。このため、現在のような近代的設備の厩舎や放牧場等を持つ牧場での管理飼育下にある馬に比べて栄養・健康状態は良くなく、ケガや感染症で死ぬ確率が高かったであろうことは容易に想像できる。

青木更吉氏は『小金牧をあるく』の中で、小金牧5牧全体で享保6(1721)年に1,002疋、弘化3(1846)年にお囲い牧分を除き1,350疋という野馬生息数の統計数字を示している。

大畔中ノ割遺跡のある小金牧の資料ではないが、『酒々井町史』には佐倉牧の牧士与頭の家柄であった嶋田家の文書資料が収録されている。嶋田家文書は、佐倉牧7牧の内、主に小間子牧、取香牧、矢作牧、油田牧あぶらだの4牧に関する膨大な文書群であり、捕馬数、残馬数、斃馬数等、統計資料として用いるに十分な記録が残されていることから、本稿ではこれを多用する。

なお、同じく酒々井町史の嶋田家文書を用いて金澤真嗣氏が精緻な分析を行っている(金澤2020)が、金澤氏は野馬の生産と生態を把握することを目的としているため折れ線グラフを多用している。本稿は目的を異にしているため、改めて元のデータから数字を拾い直して集計表を作成した。

まず、佐倉牧の小間子牧、取香牧、矢作牧、油田牧の4牧には、どれくらいの数の馬がいたのかを集計した基礎資料が第1表 捕馬数集計表、第2表 残馬数集計表、第3表 斃馬数集計表である。毎年捕馬が行われ、江戸城に送られる馬、払い下げとなる払い馬等を集計したのが第1表の捕馬集計表であり、その年にそれぞれの牧に残った馬を集計したのが第2表の残馬数集計表であり、さらにその年に亡くなった馬を集計したのが第3表の斃馬数集計表である。これ等がきれいに揃っている年があればその年の一年間の馬の飼育数という形で表すことができるのであるが、残念ながらこの三つの記録がきれいに揃っている年は無い。特に斃馬数の記録は少なく、4牧全体の記録がきちんと

第1表 佐倉四牧捕馬数集計表

年号	年	西暦	計	小間子牧 駒 駄	取香牧 駒 駄	矢作牧 駒 駄	油田牧 駒 駄
文政	7	1824	165	61 13	23 7	44 3	12 1
	12	1829	112	47 3	14 6	28 6	8
	13	1830	124	52	25	38	9
天保	2	1831	138	56	27	43	12
	3	1832	168	72	24	54	18
	4	1833	78	—	—	—	—
	5	1834	81	36 2	12 2	23 2	3 1
	6	1835	104	47	19	33	6
	8	1837	107	43	23	33	9
	9	1838	103	43	20	32	9
	10	1839	144	60	28	37	19
	11	1840	105	43	22	32	8
弘化	4	1847	91	40	18	25	8
	5	1848	70	26	14	24	6
嘉永	2	1849	75	30	16	23	6
	3	1850	77	31	16	24	6
	4	1851	91	33	20	29	9
	5	1852	90	33	23	27	7
	6	1853	88	37	17	27	7
	7	1854	75	31	19	20	5
安政	2	1855	80	32	16	25	7
	3	1856	32	—	—	27	5
	5	1858	98	41	21	26	10
文久	1	1861	108	61	11	26	10
	2	1862	97	40	15	32	10
	3	1863	99	42	20	31	6
元治	1	1864	99	40	22	30	7
慶応	1	1865	71	21	8	34	8
	2	1866	100	37	23	31	9
	3	1867	83	33	24	21	5

第2表 佐倉四牧残馬数集計表

年号	年	西暦	総数	小間子牧	取香牧	矢作牧	油田牧
寛政	8	1796	1,625	629	424	437	135
	9	1797	1,565	608	378	438	141
	12	1800	1,821	706	455	494	166
享和	1	1801	1,796	686	461	479	170
	2	1802	1,841	736	398	515	192
文化	2	1805	1,583	685	376	410	112
	3	1806	1,751	780	359	482	130
	14	1817	1,669	695	312	515	147
文政	11	1828	1,258	461	291	399	107
	12	1829	1,458	621	303	432	102
天保	3	1832	1,438	591	296	419	132
	4	1833	884	346	207	281	50
	10	1839	1,199	450	270	331	148
	11	1840	1,208	456	264	346	142
安政	5	1840	1,147	444	272	342	89
万延	1	1860	980	456	267	159	98
文久	2	1862	1,194	468	259	352	115
	3	1863	1,202	469	263	357	113
元治	1	1864	1,208	471	264	358	115
慶応	1	1865	1,211	478	262	358	113
	2	1866	1,212	479	257	363	113
	3	1867	1,138	485	255	277	121

第6表 小金牧村明細帳等

村名	元号	年	西暦	月	家数	人数	馬数	斃馬捨場	馬捨場
長崎村	元禄	2	1689	—	—	—	4		
鱈ヶ崎村	宝永	5	1708	10	58	350	27		1
長崎村	元文	4	1739	9	7		1		
鱈ヶ崎村	寛保	1	1741	6	68	306	22	1	
加村	寛保	1	1741	6	79	377	26		1
東深井村	寛保	1	1741	6	66	198	29		1
西深井村	寛保	1	1741	6	124	499	44		
中曾根下谷新田	寛保	1	1741	6	71	331	5		
駒木新田	寛保	3	1743	8	32	162	8		
駒木新田	寛延	2	1749	7	26	—	—		
古間木村	宝暦	12	1762	3	9	51	3		
大群新田	寛政	12	1800	12	6	27	2		
駒木新田	文化	2	1805	2	29	131	7		
十太夫新田	文化	2	1805	2	10	58	2		
鱈ヶ崎村	文化	6	1809	6	60	345	16		
初石新田	文政	2	1819	2	2	13	—		
大群新田	文政	2	1819	6	5	28	—		
野々下村	天保	8	1837	1	—	45	3		
大群新田	天保	9	1838	閏4	5	26	1		
十太夫新田	天保	12	1841	4	13	71	—		
芝崎村	天保	14	1843	6	11	34	—		1
前ヶ崎村	天保	14	1843	6	18	111	14		1
名都借村	慶応	4	1868	6	43	283	—		
三輪野山	—	—	—	—	17	68	—		

第3表 佐倉四牧斃馬数集計表

年号	年	西暦	月	総数	小間子牧	取香牧	矢作牧	油田牧
寛政	10	1798	5	78	24	15	25	14
寛政	12	1800	5	133	41	30	39	23
享和	1	1801	6	65	19	17	19	10
	2	1802		109	24	23	49	13
	3	1803		123	35	34	37	17
文化	1	1804	4	255	74	65	70	46

第4表 佐倉四牧犬打ち数集計表

年号	年	西暦	計	小間子牧	取香牧	矢作牧	油田牧
寛政	10	1798	44	13	10	11	10
	11	1799	34	15	6	9	4
享和	1	1801	32	10	7	13	2
	2	1802	27	11	7	5	4
	3	1803	40	11	6	19	4
文化	1	1804	30	8	7	7	8
	6	1809	79	14	17	38	10
	8	1811	47	16	8	20	3
文政	5	1822	241	—	—	—	—
	6	1823	67	23	19	18	7
	8	1825	233	70	84	74	5
	10	1827	248	34	88	110	16
	11	1828	384	—	—	—	—
	12	1829	323	59	91	143	30
	13	1830	380	71	113	160	36
天保	2	1831	282	—	—	—	—
	3	1832	302	—	—	—	—
	4	1833	270	—	—	—	—
	6	1835	213	—	—	—	—
	8	1837	280	—	—	—	—
	9	1838	161	—	—	—	—
	10	1839	148	44	36	50	18
	11	1840	193	46	56	62	29
安政	7	1860	366	88	105	122	51
慶応	1	1865	299	92	73	94	40
	2	1866	331	93	90	104	44
	3	1867	233	79	55	72	27
	4	1868	147	47	33	39	28

第5表 佐倉四牧面積(慶応4年)

	縦(間)	横(間)	坪	m <sup>2</sup>
小間子牧	6,480	960	6,220,800	20,528,640
矢作牧	4,320	1,000	4,320,000	14,256,000
取香牧	3,240	840	2,721,600	8,981,280
油田牧	3,240	600	1,944,000	6,415,200
計			15,206,400	50,181,120

※第1～5表は『酒々井町史 資料集二～四』から作成

第7表 小金牧内斃馬捨馬一覽表(享保15年検地帳)

村名	斃馬捨場規模	面積(m <sup>2</sup> )
初石村	長さ9間×横3間	87.5
大群新田	長さ7間×横7間	158.8
東深井新田	長さ8間×横6間	155.5
中野久木新田	長さ9間×横7間	204.1
駒木新田	長さ6間×横5間	97.2
十太夫新田	長さ10間×横5間	162.0
前ヶ崎新田	長さ10間×横4間	129.6

第8表 駒木新田宗門人別帳

年号	年	西暦	月	家数	人数	馬
文化	3	1806	3	31	142	10
文政	5	1822	3	29	161	10
安政	5	1858	3	31	224	8
文久	3	1863	3	33	235	8

第9表 十太夫新田人別帳

年号	年	西暦	月	家数	人数	馬
文政	8	1825	3	13	71	1
天保	5	1834	3	13	74	3

※第6～9表は流山市史「近世史料編I～II」から作成

残っているのはわずかに6年分のみである。

統計を平均値・中央値のいずれでとるのが良いのかの問題はあるが、年毎のばらつきが大きいことからここではいずれの集計も中央値をとって考えてみた。

まず捕馬数から見ていく。4牧揃って捕馬数の集計が残っているのは、文政7(1824)年から慶応3(1867)年までの間の28年分で、最多は168疋、最少は70疋で、中央値は98.5疋である。次に残馬数であるが、4牧きれいに揃っているのは寛政8(1796)年から慶応3(1867)年までの間の21年分で、最多は1,841疋、最少は884疋で、中央値は1,258疋である。最後に斃馬数は寛政10(1798)年から文化元(1804)年までの間の6年分が残っており、最多が255疋、最少が78疋で、中央値は116疋である。実態としては集計洩れ等があったはずであるが、捕馬数に残馬数を加えたものがその年に牧にいた馬の数であると仮定すると、中央値の合計で1,356.5疋となる。斃馬がすべてこの数の中に含まれているか否かは難しいところであるが、この中に含まれているとすれば、毎年 $\frac{116}{1356.5}$ という計算が成り立ち、8.5%ということになる。この死亡率が高いのか低いのかは筆者には分からないが、中央値で見ても4牧合計の年間斃馬数が116疋ということは、斃馬処理にはそれなりの場所が必要であったことは容易に想像できる。

なお参考までに、当時の佐倉牧4牧の広さを第5表に示しておく。

## 5 斃馬の処理について

前節で各牧における年間の斃馬数はかなりの数に上がることが分かった。では、これらの斃馬の処理は実際どのように行われていたのだろうか。すべてが大畔中ノ割遺跡で見たように犬落とし=シシアナに埋めていたのだろうか。

青木更吉氏の『小金牧をあるく』(青木2003)には、流山市江戸川台、市野谷に斃馬捨て場があったという地元の人からの聞き書きが記されている。また、同氏は享保15(1730)年の検地帳の記録から、流山市駒木新田、十太夫新田、中野久木新田、大畔新田、青駒新田、前ヶ崎新田にそれぞれ「斃馬捨場」があったことを紹介している。『流山市史』の史料からそれを集計したのが第7表の斃馬捨場一覧表である。さらに、同氏同書によれば、牧の中の野馬とは別に、払馬(払い下げの馬)の遺骸の捨て場であった「馬捨場」が別にあったとされていることから、「斃馬捨場」は牧で飼育さ

れていた野馬の専用の遺骸処理場であったと考えられる。先ほど記したとおり、年間でこれだけの数の斃馬が出るのであるから、やはりそれなりの広さの「捨場」が必要であったのである。

なお、八千代市吉橋に所在した東向遺跡では、隙間無く掘られた二列のシシアナ列の覆土上層から馬骨や馬歯が多数出土していると報告されているが、浅い部分での検出であったことから、埋葬ではなく捨てられたウマの遺骸と考えられる。ただし、東向遺跡は<sup>しもの</sup>下野牧の外側にあり、牧からは北東に2.5kmほど離れた地点にあることから、解釈はさらに複雑である。

## 6 文書資料に残る野馬の埋葬例

野馬の埋葬例として、藤崎牧士史料館所蔵文書中に「文政三年三月 矢作牧野馬病死につき一札」という資料が見える。概略は「野廻りの者から黒鹿毛女の老馬一疋が牧内で病死しているのを発見したと報告があったので届け出て見分に来てもらい、病死に間違いないことが確認されたのでそこに埋めた」という内容である。この場合、敢えて屍体を牧の外に持ち出すことはせずに牧の中に埋めており、牧の外で何体ものウマが埋葬された形で見ついている大畔中ノ割遺跡の例とは異なるようである。

## 7 犬打ちと犬落とし(=シシアナ)について

詳細な記述は報告書に譲るが、筆者が担当した調査区内のウマの埋葬土坑4基を含め、大畔中ノ割遺跡で検出されたウマの骨はすべて大型の深い掘込みの土坑の中から検出されている。写真1を見れば分かるとおり、ウマの骨と比べてもかなり大きな長楕円形の平面形で、非常に深い掘り込みの穴であった。これらの土坑は、道路跡と考えられる浅い溝状の掘り込みの中に間隔を置いて設けられていたことから、犬落とし=シシアナであろうと考えられた。なお、この溝状遺構検出の段階で、溝状遺構の中にハードローム塊を含む大型遺構が点々と見えた。それがこの大型のシシアナ群だったのである。

牧の周辺に設けられた犬落とし=シシアナ(穴)は、半野生の状態で放牧している野馬にとっての最大の害獣であるヤマイヌ(=野犬)やオオカミを駆除することが主たる目的であったと考えられる。特に子馬は野犬等の格好の餌食であり、野犬の駆除は牧の管理においては重大な課題であった。酒々井町史に収められている嶋田家文書には数多くの犬打ちの記録が残されてお

り、牧を管理する牧士たちは火縄銃を携帯していた。また、火縄銃に要する費用についての記録も残されている。毎年牧単位で打ち殺した年間の犬の頭数が報告されており、犬打ち数の内訳として「平打」、「落穴分」と書き分けて記載されている例も見受けられる。佐倉4牧での記録に残る限りの犬打ちを集計したのが第4表の犬打ち数集計表である。寛政10(1798)年から慶応4(1868)年の間の28年分の記録があり、年間で最多で384疋、最少で27疋の犬を打ち殺している。これも数には年毎に著しいばらつきが見られ、中央値は223疋である。

例えば、嶋田家文書寛政8(1796)年の「辰年御用留帳」正月十七日には、「…牧々江犬落穴場所之儀者、野附村々毎二拵候ニ不及、一牧に二つ三つ位、犬多出候場所見廻り、目論見拵可申候…」とあり、犬落としの穴は各牧に2、3か所程度設けられていたようである。当然のことではあるが、牧の内にこしらえてしまうと野馬が落ちる可能性があることから、牧の外側に設けられるのが一般的であったと考えられる。また、先の文書の後段には「…前書落穴出来犬落候ハ、縦飼犬成共早速為打殺、犬之尾切落取置追而見分相越候間其尾共請取江戸表江為持御見分ニ入候ニ付…」とあり、犬落としの穴に落ちた犬はたとえ飼い犬であろうとも打ち殺し、尾を切り落とし見分していたことが記されている。

さらにこれも一例であるが、同じく寛政9(1780)年の「野馬方諸御用日記」他には、犬落穴の囲いに用いた木や竹の本数や代金が記されており、犬落としの穴は木や竹で囲いがこしらえられていたことが分かる。

修復に要した人員数の例としては、同じく寛政13(1801)年の「酉年野馬諸御用留帳」には覚として、周辺の村から取香牧犬落穴修復に計12人、取香取込前割犬落穴修復に計26人をそれぞれ1日出している記載があり、落穴の修復は大人数を費やしていたことがわかる。なお、坑底の土を浚い、柵を補修する修復作業だけでなく、古い犬落としの穴を埋めて新たに掘り直すような大がかりな例も記録に残されている。

## 8 村落内で飼育していた馬である可能性

ここまで、牧の斃馬である可能性が高いという論に立って話を進めて史料を見て来ているが、念のため、周辺の村落内で飼育されていた馬(主に農耕馬)である可能性についても考えてみたい。周辺の村々でどの程度の数の馬を飼育していたのか、また、飼養する馬の

頭数は年毎にどれくらい変化するのか。この検討材料となる資料が『流山市史』の中に残されている。

第6表は村毎の明細帳である。馬数を家数で割り村毎の馬の保有率を出してみると、最大で77%、最小で7%で、かなりばらつきが見られる。平均値では31%、中央値では32%で、1軒での多頭飼養を考えなければ大体3軒に1軒は馬を保有していたことになる。

次に、同一の村の中で馬の保有数・保有率がどの程度変化するかを見たのが第8表の駒木新田と第9表の十太夫新田の人別帳の資料である。家数、人数、馬数が揃って記載されている年が、駒木新田では4回あった。第8表を見ると、文化3年から文久3年の間の家数の変化は29軒から33軒の間で、馬の頭数の変化は10頭から8頭の間であった。農家が農耕馬として同一の馬を何年くらい飼養するのかという問題はあがあるが、この頭数の変化だけを見ていると、農家における馬の飼養頭数の変化はあまり無く、馬の平均寿命を25~30年で考えた場合、文化3(1806)年から文久3(1863)年の57年間で、各戸での飼養個体は大体2回程度は入れ替わっていると考えられ、この間に20頭程度は亡くなっていると考えられる。第9表は十太夫新田の人別帳で、こちらは家数、人数、馬数が揃って記載されている年は2年だけで、文政8(1825)年は13軒で1頭しか保有していないが、天保5(1834)年は23%の保有率で、先ほどの駒木新田の保有率にかなり近く、また、変化も大きなものではなかった。

記録に残る大畔新田での馬の飼養頭数は寛政12(1800)年に家数6軒で2頭、天保9(1838)年に家数5軒で1頭である。これを考えると、大畔新田の集落内の飼養馬を埋葬したと考えるには、大畔中ノ割遺跡で発見された馬の個体数は多過ぎるということになり、やはり牧内の斃馬を埋めたものである可能性が高いであろうという結論になる。

なお、青木更吉氏によれば、払い馬は死ぬまで飼養する例は少なく馬喰に頼んで買い換えたりしたようではあるが、嶋田家文書には、払い馬を割賦で購入する例、払い馬の代金の支払いが滞る例が数多く残されており、農民にとっては決して安い買い物ではなく、実態として取っ替え引っ替え買い換えられるようなものではなかったのではないかと考えられる。

以下は余談であるが、北関東の純農村地帯で育った筆者の子供時代の昭和40年代は、農耕動力はほぼ耕耘機へと移行している時代であったが、田起こし等の際には牛や馬は動力源として活躍していた。実際に、自

宅の近所を見渡しただけでも何軒もの農家で飼養されていた。そして、農耕用の馬を飼養している農家よりも農耕用の牛を飼養している農家の方が多かったと記憶している。それに比べて、今回分析の対象として使用した小金牧に関わる村々の明細帳等には「牛無し」という記載が多々見え、地理的・時間的隔たりはあるものの、牧の周辺の村々の特殊性というものを強く感じた。

## 9 野馬を殺して食べた(かも知れない)記録

唐突な話ではあるが、ここまで病気やケガによる野馬の死や、野犬やオオカミに襲われたことによる死を念頭に置いて史料を見てきたが、野馬を殺して食べた記録というものはあるのだろうか。ウマの骨に解体痕がある場合に考えれば良いことではあるが、このことも念のため考えて史料を漁ってみた。

該当する可能性のある史料が、嶋田家文書に残されている。小間子牧付の村である下砂村の者3名が、牧から村の中へ出て来ていた母馬3疋、当才馬1疋の都合4疋を深田に追い込み、母馬3疋を打ち殺し、当才馬1疋は打ち据えた上で牧に戻し、死馬の肉を食べて、これを埋めて隠したという天保6(1835)年3月の文書である。名主・組頭・百姓代から牧士与頭の嶋田氏等へ提出された最初の文書には上述のように記されているのであるが、その後、「御尋ニ付奉申上候」として再度名主・組頭・百姓代から嶋田氏等へ提出している文書には、母馬1疋、当才馬1疋が村の畑に入っていたのを先の3名の者が追い出そうとしたところ、馬は深田に入ってしまう、当才馬は引き上げることができたが、母馬は死んでしまいこれを埋めて隠したものである、という内容に変わっている。さらにその後、牧士与頭の嶋田氏等から野馬奉行の綿貫氏に提出した報告書には、正月15日という冬の寒さで深田に入った母馬は死んでしまい、これに驚いた3名の者がその遺体を埋めて隠したのである、という内容に変わってしまっている。

野馬が牧から村に出て来て畑を荒らしていたので怒って殺してしまい、さらにそれを食べて埋めて隠したというのは、ひどい話ではあるが極めて人間的な話である。しかし、このように三通りの史料が残されている以上、殺して食べたのが事実と即断するのは難しい。勿論、野付の村の者たちの蛮行の事実を伏せて、曲げて、ことを穏便に済ませようとした牧士等の隠蔽工作の結果が残された一連の史料であるとすれば、そ

れはそれで極めて人間的で面白い。

## おわりに

発掘調査の成果は考古学的考察により結論を導き出すのが常套的手法であろうと考えるが、「結論」においても記した通り、県内に所在した近世の牧については膨大な文書資料が残されていることから、それらを最大限に生かしての検討を試みたのが本小論である。勿論、筆者は近世文書については門外漢であることから、原史料に当たるような無謀なことはせず、すべて県市町村史に掲載されている専門家による翻刻史料を活用した。

なお、本小論の結論で用いた文政十年五月の駒木新田名主等から出された文書は重要な判断根拠となることから、念のため千葉県立中央博物館の内田龍哉氏にお願いして同文書の内容を確認した。内田氏にはこの場を借りて礼を申し上げたい。

また、本稿を草するにあたっては、流山市教育委員会から許可並びに資料の提供を頂いた。特に手続きの窓口となって頂いた小川勝和氏には発掘調査の際にもお世話になった。同じく礼を申し上げたい。

## 引用・参考文献

- 青木更吉 2001『小金牧 野馬土手は泣いている』
- 青木更吉 2002『佐倉牧 統野馬土手は泣いている』
- 青木更吉 2003『小金牧をあらく』
- 青木更吉 2007『佐倉牧をあらく』
- 金澤真嗣 2020「佐倉牧における野馬の生産と生態」『馬の博物館研究紀要 第22号』
- 鎌ヶ谷市 1992『鎌ヶ谷市史 資料編Ⅲ・下 近世2』
- 久留島浩 2008「近世下総の牧に関する一考察」『牧の考古学』
- 酒々井町 1976『酒々井町史資料集二(佐倉牧関係一)』
- 酒々井町 1979『酒々井町史資料集三(佐倉牧関係二)』
- 酒々井町 1980『酒々井町史資料集四(佐倉牧関係三)』
- 高見澤美紀 2007「房総の牧場と村々」『千葉県の歴史 通史編 近世1』
- 千葉県 2004『千葉県の歴史 資料編 近世5(下総1)』
- 千葉県教育委員会 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)一東葛飾・印旛地区(改訂版)一』
- 千葉県教育委員会 2005『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』
- (公財)千葉県教育振興財団 2014『西八千代北部地区埋蔵文化財発掘調査報告書4』
- 流山市 1987『流山市史 近世資料編Ⅰ』
- 流山市 1988『流山市史 近世資料編Ⅱ』
- 松戸市 1978『松戸市史 中巻 近世編』
- 松戸市立博物館 1994『特別展 馬と牧 かつて松戸は牧場「まきば」だった』